

〈贈る言葉〉

最終講義での “Feeling good”

今井由美子

甲元洋子先生は18歳で大学に入学され、68歳で退職を迎えられた。実に50年という長きにわたり同志社女子大学での日々を過ごされた。1970年4月に同志社女子大学英文学科に入学され、1974年3月に卒業後、同志社女子大学大学院文学研究科へ進まれた。1976年3月に文学研究科修士課程修了、1982年9月に文学研究科博士課程を修了され、1982年10月に専任講師となられた。1987年4月に同志社女子大学助教授に、1995年4月に教授に、2001年4月に大学院文学研究科英語英文学専攻博士課程（前期）教授、2004年4月には博士課程（後期）教授へと昇任された。2017年4月からは同志社女子大学および大学院文学研究科英語英文学博士課程（前期・後期）の特別任用教授として4年間、教鞭をとられた。

校務については、助教授就任と同時に学生主任（1987年10月～1989年9月）、宗教主任（1992年4月～1995年3月）、教務主任（1999年4月～2000年3月）、英語英文学科主任（2000年4月～2003年3月）、総合文化研究所長（2003年4月～2004年3月）、学生部長（2004年4月～2006年3月）、宗教部長（2008年4月～2010年3月）、そして文学研究科英語英文学専攻主任（2010年4月～2015年3月）を歴任された。2018年4月から2年間英語英文学会会長をお務めになった。

と、堅苦しい話はここまでとしよう。甲元先生のお人柄がわかるエピソードを紹介しながら「贈る言葉」とさせていただこうと思う。

甲元先生は、学部生時代にイギリスのロマン主義詩人の John Keats (1795-1821) の描く非現実世界の美しさに惹かれ、研究の道へ入ることになる。Keats の研究を深めるにつれ、与えられた厳しい現実と果敢に対峙する

彼の精神の強さに圧倒される。Keats は決して恵まれた人生を送ったわけではない。しかし現実から逃げることなくその清濁美醜のすべてを正視し受容しようとした精神の強さに魅力を感じたという。また、Keats とは全く象徴的な上流階級生まれの詩人 Robert Browning (1812-1889) にも研究の幅を広げる。恵まれた生活に憧れ続けた Keats と恵まれた生活が当然だった Browning が、彼らの作品の中で描き出す室内描写の違いに着目された。

しかし「このわたしが瘦せたんです！」と甲元先生が今でも鮮明に思い出すのは博士論文を執筆した大学院時代だという。なかなか書き進めることができず、苦しい時期がしばらく続くものの、軌道に乗って書けるようになってからは、執筆することの「しんどさ」の中にわずかな「楽しみ」を見出すことができ、その時に真の研究することの楽しさが解った気がすると甲元先生は振り返っておられる。

専任講師となり在外研究の機会を得た甲元先生は1985年9月～1986年1月の約半年に渡り、アメリカ、マサチューセッツ州のノーサンプトンにある名門女子大学のスミス・カレッジに留学される。スミス・カレッジでは、いい意味での学生たちのアグレッシブな姿勢・態度に感心し、かつ勉強家が多かったことに驚いたという。また、50代、60代の“mature students”が多く、若い現役学生に負けず劣らず、頑張っている姿も非常に印象的だったという。「若い女子学生たちがやる気満々で負けん気丸出しなのに比べると、オバサマ学生たちには、長い人生を生きて経験を積んで参りましたという自信と落ち着きがあり余裕綽綽。食堂で“Long Day!”（今日はシンドイ一日だったわ）などため息交じりに呟きながら、珈琲を飲みふ〜っと煙草をくゆらしている（当時はアメリカではヘビースモーカーの女性が多かった）姿が本当に貫禄十分で粹で、年を重ねることは素敵だなあと思いました」と。スミス・カレッジでの留學生活が半年を過ぎた1月にお父様が急逝され、在外研究を打ち切って帰国を余儀なくされたことはお辛い思い出の一部でもあろう。

学科主任（2000年4月～2003年3月）時におけるエピソードを伺ってみた。

なんと、甲元先生はご自身が学科主任をされていた時の記憶がほとんどないとおっしゃる。何かあったはずなのに覚えていないと（それほどに激務だったのだろうか）。甲元先生は役職に就かされるのが嫌で、学科主任が決まった際もかなり悩まれたという。聞くとところによると、大真面目で5000円を払い八坂神社で「厄払い」の御祈禱をしてもらったにもかかわらず、結果的に何の御利益もなかったらしい。学科主任期間はとにかく早く早く任期が終わることだけを願い、「喰う寝るだけで精一杯。正に這うようにして生き延びた3年間」だったと「記憶にない学科主任時代」を振り返っておられた。

そんな学科主任の苦労を労うかのように、1年後の2004年春に野良の子猫が甲元先生の家我突然現れた。「みー子」と名付けられ、2011年11月に天に召されるまで共に暮らした7年間で、甲元先生を驚かせたのがみー子の賢さであった。先生の話すことをじっと目を見つめて真剣に聞くのだという。一度試しに英国17世紀、動乱の時代の大まかな流れを語ったところ、みー子は最後まできちんと聞きいてくれて、甲元先生を感動させた。また、先生は「浦島太郎」改め「浦島みー子」というみー子が主人公の物語を、日本語、英語両バージョンで時々語り聞かせていたらしい。みー子はいつも目を真ん丸にして一生懸命聞いてくれた。特に途中の「鯛や平目の食べ放題」という箇所になると、なんとグッと身を乗り出して来るという熱心さには、いつも「賢い猫やなあ」と感心させられたとのこと。すごいな、このみー子。そういえば、ある時純正館409の部屋で、甲元先生が「わたしは頑固者で、誰の言うこともきかないけれど、みー子の言うことだけは聞くの」と言われたのを鮮明に覚えている。犬派のわたしは後日試しにと思い「元気のでる猫語録日めくり」万年カレンダーを買ってみた。真顔の猫が人間を毎日励ましてくれるのだが、頑張りすぎない適度な励ましが、実にいい。「できることからやってみる」「疲れたら、またあとで」と、こんな感じである。以来、勝手にその日めくりの中の猫を「みー子」と呼んでいるわたしがいる。

2020年2月下旬、甲元先生の研究室から少しずつ「断捨離」後の品々が廊

下に出始めた。まず新品同様のレターケースが出品された。「みー子のおすすめ」とメモが貼ってあった。みー子がすすめるなら！と、そのメモと共にレターケースは今井の研究室に引き取られた（大活躍中である）。次の出品は古い洋書の束であった。長い間研究のために大事にされていたに違いない洋書たちがいよいよ研究室から出され甲元先生の手から離れるのかと思うと、一抹の寂しさをわたしでさえ感じないわけにはいかなかった。そのまま数日が過ぎた。わたしは何とかこの洋書たちの居場所を見つけたかった。今出川通りの「童夢」が新装開店することになった（オーナーの恵子さんがアンティーク好き）。童夢の店内に「飾る」ために先生がずっと大切にされていたこの古い洋書を、頂きたいとお伝えするのは、一度は躊躇したものの、このままでは処分されてしまうと思い、勇気をだして甲元先生に尋ねた。すると、古い洋書はイギリス文学者だったお父様から譲り受けたもの、お父様は紅茶好きで甲元先生は珈琲好き、研究室から外の世界に出された洋書たちが、次はアンティーク喫茶店に引き取られ、お店を飾ることになるとはこんなうれしいことはない…。童夢の今出川通りに面した出窓に、甲元先生の研究室から養子縁組された古い洋書が誇らしげに背筋を伸ばしている。近いうちに甲元先生と一緒においしい珈琲を飲みにでかけたいと思っている。

甲元先生は2020年4月に同志社女子大学より名誉教授の称号を授与された。その栄誉と共に50年の長きにわたり甲元先生の生活の拠点となった大学キャンパス、研究室を去る寂しさはいかばかりであろう。最終講義後の茶会で「もう研究はしません」「これからは短歌の世界を楽しみたいと思います」とにこやかにさらりと言われた。就職し間もなく誘われて「教職員短歌会」というサークルに参加したのがきっかけで、短歌づくりは30年以上も続いている趣味だそう。現在は「ポトナム」という結社に属しておられるとのこと。そう、趣味というのは、このようなことを言うのだ。退職してから何かをはじめたのではない。仕事で多忙を極めながらも「そのため」の時間を捻出し、あえて余裕を味わうのが趣味だ。すでに30年も続いている甲元先生の短

歌は、これからもなお一層円熟味を増していくことであろう（タイミングよく我が家の日めくりみー子は「やりたいとおもったらはじめてみる。はじめなければつづかない」と言っているではないか。わたしも何か始めなければ…。甲元先生、やはりみー子はすごいです）。

“Today is the first day of the rest of your life!”と退職を祝う言葉がある。甲元先生が「最終講義は歌でカッコよく終わりたい」と選ばれた歌のその最後の部分に“*It's a new dawn, it's a new day, it's a new life for me, and I'm feelin'…good.*”（*Feeling Good* by Nina Simone）とあった。Feeling good. なんとすてきな一言ではないか。

甲元先生、最後になりましたが、これまでに至る学生の指導・育成、専門分野における研鑽、大学運営への貢献、そして何よりも英語英文学科、英語英文学会のために時間を惜しまず、ご尽力くださり、心より感謝いたします。どうぞ折をみて今出川キャンパスへおでかけください。

「ではでは～！みー子の母」

甲元先生が毎回メールの最後に添えてくださる一言で終えたいと思います。

追伸：甲元先生とわたしはうさぎ年生まれ。うさぎ年生まれで悪い人に出会ったことはありません。そして今回この原稿を書きながら知ったのですが John Keats もうさぎ年生まれでした。